

地域と協働した探究学習で、 広い視野と挑戦する姿勢を育む

希望進路は地元志向でも、地域や社会に対する関心が低い生徒が少なくなかった宮城県岩ヶ崎高校。そこで2023年度、生徒の目が地域や社会に向くよう、地域と協働した探究学習や課外活動を導入した。生徒の意欲を喚起するべく、身の回りの課題からスタートし、行動範囲を徐々に広げるカリキュラムとしている。

実践の全体像

生徒に自信を育む「岩高探究プロジェクト」

地域との協働を中心とした様々な「岩高探究プログラム」で視野を広げながら、「総合的な探究の時間」において半径5m、半径50km、半径∞の「アクションプラン」に挑戦し、それらの経験を進路選択につなげている。



※学校資料と学校への取材を基に編集部で作成。



三浦大樹
みつうら だいき
地域コーディネーター
同校に赴任して1年目。地元商店街の地域おこし協力隊。



高橋翔平
たかはし しゅうへい
進路指導部1学年探究担当
同校に赴任して5年目。1学年担任。国語科。



大沼宏多
おおぬま こうた
進路指導部総合探究主任、2学年主任
同校に赴任して3年目。英語科。



千葉朋彦
ちば ともひこ
進路指導部副部長
同校に赴任して4年目。3学年担任。英語科。



津渡香純
つかづか かほり
進路指導部部長
同校に赴任して15年目。数学。

学校概要
設立 1951 (昭和26) 年
形態 全日制 / 普通科 / 共学
生徒数 1学年約30人
2022年度卒業生進路実績 国公立大は、室蘭工業大、岩手大、福島大、釧路公立大、名寄市立大、青森県立保健大、青森公立大、宮城大、秋田県立大、高崎経済大に16人が合格。私立大は、東北学院大、東北福祉大、北里大、専修大、日本大、文教大などに延べ79人が合格。

学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする —

取り組みの背景・全体像

地元志向でも、地域への関心が低い生徒たち

宮城県岩手ヶ崎高校は2023年度、宮城県「地域進学重点校改革推進事業」の指定を受けて、地域と協働した「岩高探究プロジェクト」をスタートさせた。進路指導部部長の渡邊香純先生は、その背景を次のように語る。

「本校の生徒は、希望進路は地元志向ですが、入学時は地域や社会への関心が低く、学校の近くに全国から移住者が集まる六日町通り商店街があることも知りません。そこで、生徒が地域や社会に関心を持てるよう、地域のよさを生かした活動を行うことにしました。地元志向の生徒が地域の状況を知ること、将来像を具体的に描けるようになるのではないかと期待もありました」

同プロジェクトは、「総合的な探究の時間」(以下、総合探究)で行う「アクションプラン」と、様々な正課・正課外活動を行う「石高探究プログラム」の二本柱から成る(P.4図)。いずれも、自分の身の回りから地域、日本、そして世界へと、生徒が視野や行動の範囲を広げながら活動できるようにした。「生徒は失敗を恐れる傾向があった

ため、取り組みやすい身の回りの課題から始めることで、挑戦する意欲や行動力を育もうと考えました(渡邊先生)

意欲を喚起する「アクションプラン」

視野も関心も挑戦も、徐々に広がっていく

「アクションプラン」は、1年次1学期の「半径5mからのアクションプラン」から始まる(図1)。生徒は学校内や自分の関心から課題を見だし、個人かグループで探究する。23年度は、「校内の売店の誘致」「不要物の活用法」などの課題が設定された。1学年探究担当の高橋翔平先生は、こう語る。

「『アクション』を通じて、生徒に何かを立ち上げて行動する経験をしてほしいと思っています。チョークの再生に挑戦したチームに地域のイベントを紹介したところ、自分たちの経験を生かし、再生チョークのワークショップを設けました」

そのようにして生徒の意識を地域や社会に向けさせていき、1年次10月からは「半径50kmのアクションプラン」に、2年次からは「半径∞」として各自の関心に基づく個人探究に取り組む。

23年8月には、六日町通り商店街の地域おこし協力隊を務める三浦大樹さ

図1 「総合的な探究の時間」で行う「アクションプラン」の3年間の計画と、生徒のアクション(例)

	1年次	2年次	3年次
	地域探究 (社会の課題+行動する力)	自らの関心分野の探究 (社会の課題+学問分野)	
育てたい力	<ul style="list-style-type: none"> 課題に対して前向きに向き合う姿勢の育成 自分が持っているリソースにとらわれない思考 失敗を前提に行動し、失敗から学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 社会の課題に関心を持ち、その解決に向けて他者と協働しながら考え抜き、行動する力 将来の目標を明確に設定し、目標達成に向けて粘り強く取り組む姿勢 	<ul style="list-style-type: none"> 社会の課題を主体的に捉え、その解決に向けて多角的な視野で考え、行動し続ける姿勢 多様な情報を的確に把握し、他者との議論を通して自らの考えを深め、的確に表現する力
4月		探究③ 個人探究Ⅰ	探究④ 個人探究Ⅱ続き
5月	探究① アクションプラン	(アクションを含む)	
6月	こうだったらいいな (Do)	半径∞の世界	まとめ 探究論文の作成
7月	半径5mから始まる世界		
8月		オープンキャンパスで研究室訪問	
9月	ポスターセッション		探究論文の提出
10月	探究② アクションプラン②	探究④ 個人探究Ⅱ	
11月	地域実践 (グループ)	(アクションを含む)	
12月	半径50kmで考える世界		
1月	地域で実現させたいものを企画		
2月	実践する (Do)		
3月	ポスターセッション	ポスターセッション (中間発表)	



▲「チョークの粉や短くなったチョークを活用できないか」という課題意識を持った生徒が、チョークの再生に挑戦。成功した生徒は、栗原市の「秋の花山フェスティバル」で、小中学生に作り方を教える講座を設けた。

「半径∞のアクションプラン」 ゴミを減らす循環型漁業を提案

漁業による海洋汚染を、エコな素材で解決する
～LIMEX素材の漁具制作で世界規模での環境保全と産業発展～

1. 海洋汚染の課題発見	2. 解決に向けた素材「LIMEX」	3. 漁具制作	4. 漁具の活用
<ul style="list-style-type: none"> 漁具「まめ管」の課題 環境問題・マイクロプラスチック・生態系への影響 	<ul style="list-style-type: none"> 解決に向けた素材「LIMEX」 まめ管への適正・環境への配慮 課題「コストが高い」「原料を確保から仕入れに大変」「コストダウン・循環型漁業の実現」 	<ul style="list-style-type: none"> 漁具制作 企業、漁業者と連携し、まめ管の試作 実証実験でデータ収集 改良、修正 特許取得 製品化 	<ul style="list-style-type: none"> 全国的な漁具業者への営業、販売 マーケティングでシェア拡大 まめ管以外の漁具の課題について調査

九州をはじめとする、各地の漁業による、海洋プラスチックゴミ問題に、事業を応用

世界の海を綺麗にする

▶ 牡蠣の養殖に使うポリエチレン製のまめ管が海に浮遊していると知った生徒が、牡蠣の殻をまめ管に活用することを提案。2023年度「高校生みんなの夢AWARD」で地球環境賞を受賞した。生徒は研究を深めようと、九州の公立大学への進学を決めた。

*学校資料を基に編集部で作成。

んを「地域コーディネーター」として配置。週2日、進路指導室に在室し、生徒の探究学習の相談に乗っている。2年次の総合探究の授業に参加し、生徒の探究テーマの設定も支援した。

「地域おこし協力隊の活動をする中で、学校と地域の接点の少なさを感じていました。学校と地域の間立ち、学校の希望を地域に、地域の資源や課題を生徒に伝えることで、生徒の学びを深めていきたいと思っています」（三浦さん）

**意欲を喚起する「岩高探究プログラム」
「見せたいのは
「挑戦する大人の姿」**

「岩高探究プログラム」は、生徒の関心や視野を広げるための種まきとなるよう、地域と協働で多様な活動を行っている（図2）。例えば、「Iwagasaki Jimoto 大学」は年2回行う社会人講話で、地域で働く大人が個人・法人として挑戦していることを語る。

「大人たちは、与えられた仕事をただこなしているのではなく、それぞれ問題意識や目標を持ち、その解決や達成に向けて真剣に取り組んでいます。そうしたことを知ると同時に、実際に挑戦している大人の話聞くこと

で、問題解決や目標達成のためにはどのような行動をすればよいのか、そのヒントを生徒がつかめることをねらいとしています」（齊渡先生）

23年度の「岩高探究ツアー」では、東日本大震災で被災した気仙沼市や、学校が位置する栗原市に隣接する岩手県平泉町の世界遺産を訪れた。気仙沼市のツアーは、地域の課題である防災や減災について学ぼうと、震災遺構や復興の取り組みなどを見学し、地元の中高生の語り部から話を聞いた。生徒からは、「自分と同じ高校生や年下の中学生が震災の経験を語り継いでいて、自分も見習いたいと思った」といった声上がるなど、同年代の交流は生徒に大きな刺激を与えている。

生徒が主体的に取り組めるよう、大半のプログラムは参加自由だ。ただ、できるだけ多くの生徒に参加してもらいたいと、声かけを工夫していると、進路指導部副部長の千葉朋彦先生は語る。「参加者を募る際には、『歴史好き募集』などと限定せず、街づくり・観光・環境・教育などのキーワードを多く挙げて生徒に声をかけます。自分に関係があると思わせるのがポイントです」

参加を尻込みする生徒もいるが、「大丈夫、行ってごらん」と教師がさりげなく背中を押す。「生徒の挑戦を応援

図2 地域と協働した「岩高探究プログラム」(例)



小児がん患者の支援

「小児がん患者の現状を知ってほしい」と、地元の夜市でレモネードを販売

▲美術部と有志の生徒が、小児がん患者を支援するための募金活動として、地元の夜市でレモネードを販売。参加者には、2年次の個人探究で「小児がんの治療薬の現状」「患者の栄養支援や看護」をテーマにした生徒もいる。

▶地域コーディネーターの三浦さんが、地域から寄せられた課題を進路指導室前に掲示。有志の生徒が課題に取り組む。ある店は、店内の一角をどうしたら近隣住民に利用してもらえるかを相談。生徒がPR動画を作成し、SNSで配信したところ、ワークショップに利用したいと申し出があった。



Iwagasaki English Camp

地元の日本語学校に通うネパール人留学生と英語で交流

▲郡部に位置する同校では、生徒が外国人と接する機会が少ない。そこで、英語漬けの日々を送る1泊2日のキャンプを実施。生徒26人、同校のALT、地元の日本語学校に通うネパール人留学生14人が参加。一緒に料理をしたり、ゲームをしたりしながら、英語で交流した。

**事業指定後、
地域との協働を強化。
生徒が地域をリアルに
感じる活動を拡大**



Iwagasaki Jimoto Quest

地域から寄せられた課題に生徒が挑戦

※学校資料を基に編集部で作成。

学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

しつつ、寄り添い、支える距離感を心がけています」と津渡先生は語る。

意欲を喚起する「振り返りの仕組み」

ストーリー機能で目標設定と振り返りのサイクルを確立

生徒が自分の成長を実感する機会となるよう活用しているのが、「Classi」(*)のストーリー機能だ(図3)。生徒は、年度当初に自分の年間目標を設定。探究学習や課外活動、部活動などで自分が挑戦した内容や振り返りをストーリー機能に随時入力する。その上で、年4回の定期考査のタイミングで、蓄積した記録を振り返り、そこでの気づきを踏まえて目標を見直す(図4)。総合探究主任の大沼宏多先生は、ストーリー機能に活動を入力する生徒が年度当初より増えていると語る。

「その時に自分が何を思ったのか、どんな試行錯誤をしたのか、過去の自分と比較でき、自分の成長を実感できるからでしょう。自分の学びや経験を自分の言葉で記録したいという気持ちが生徒に芽生えるのだと思います」

ストーリー機能は生徒が入力したくなる書式だと、津渡先生は指摘する。

「ストーリー機能はページをまたがずに一覧になっているので、ひと目で

内容を把握することができます。ポラニアや資格取得など、活動ごとに入力欄があるので、空欄を埋めたいという欲求に駆られます。そうした動機で活動したとしても、活動する中で得られるものがあり、『これができた。次はあれをしよう』という好循環が生まれています」

取り組みの成果・展望

地域に自ら出て活動する生徒たち

様々なプログラムを始めてから、意欲的に挑戦する生徒が増えている。地域の中学生に黒板アートの講習会を開催したり、小児がん患者を支援するボランティア活動を行ったりするなど、探究学習での取り組みを発展させた新たな活動に取り組む生徒も少なくない。

生徒にアンケートを取ったところ、「社会の課題に対する関心が高まった」の肯定率が100%だった(図5)。模擬試験の成績も上昇傾向にあり、自己肯定感の高まりが教科学習に波及している様子が見える。

「地域との協働はかなり進みました。今後はほかの地域や海外の高校生との交流を増やし、新たな刺激を与えていきたいと考えています」(津渡先生)

図4 記録の蓄積のサイクル

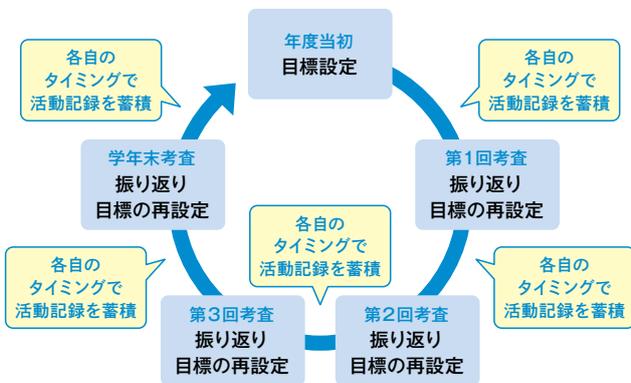


図3 「Classi」ストーリー機能の入力例



生徒は、活動前に目標を、活動後に取り組んだ内容や考えたことを入力。目標と照らし合わせて振り返る。教師はその入力内容を見て、コメントをしたり、声をかけたりする。また、その記録があることで、調査書や指導要録が格段に書きやすくなったと言う。

図5 生徒へのアンケート結果

Q. 探究活動や部活動、有志活動等の探究的な学びにおいて、地域での活動や地域の人々とかかわる場面はありましたか

はい 78.5% いいえ 21.5%

Q. 探究的な学び(授業・探究学習・探究ツアー・NIE・国際交流・国際講話・部活動・有志活動等)を通じて、社会の課題に対する関心は高まりましたか

はい 100.0%

※図3～5は、学校資料を基に編集部で作成。

学習方法の指導は?

1年次は、学習方法とペースの定着を重視

同校には、中学校と高校の学習にギャップを感じる生徒が少なくない。そこで、入学当初の各教科の授業は、家庭学習を中心に、高校における学習方法を指導し、学習のペースをつかめるよう、支援している。また、生徒一人ひとりの悩みや課題に対応するため、毎日の学習記録を見て、「数学に偏っている」「こんなテキストがある」などと、担任が生徒一人ひとりの学力や適性に合ったコメントをしている。そして、個人面談では、生徒の意欲を喚起する声かけや学習方法のアドバイスなどを意識的に行っている。

* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。